

No. 44, *The Mysterious Stranger* の不確定性

——矛盾する人間観・世界観——

筑 後 勝 彦

1. はじめに

Mark Twain は生前“*The Mysterious Stranger*”に関して三種類の原稿を書き残していた。これらの原稿は Twain の死後、彼の伝記作家で文学遺産管理人の Albert B. Paine と Harper & Brothers 社の Frederick A. Duneka によって整理され、1916 年に *The Mysterious Stranger, A Romance* という書名で出版されたが、この作品は Paine と Duneka が第一番目の原稿“*The Chronicle of Young Satan*”に手を加えたうえ、第三番目の原稿“*No. 44, The Mysterious Stranger*”のために執筆されたと考えられる最終章を繋ぎ合わせて、あたかも Twain が生前この小説を完成させていたかのように見せかけた偽作であった。この Paine-Duneka 版は Twain の遺作として普及したが、1963 年に John S. Tuckey が *Mark Twain and Little Satan* のなかでその歪曲の事実を初めて指摘し、1969 年には William M. Gibson が *The Mysterious Stranger Manuscripts* の出版によって、Twain 自身が書き残した三種類の原稿を公にした。もちろん、*Mark Twain: The Fate of Humor* (1965) のなかで、“*The Chronicle of Young Satan*”の方が Twain の意図をよく表しているとして Paine-Duneka 版を擁護した James M. Cox をはじめとして、その後も Paine-Duneka 版をベースに論を展開する研究者たちがいたけれども、現在では一般に、*No. 44, The Mysterious Stranger* がもっとも信頼の置けるテキストとして認められている。

しかしながら、*No. 44, The Mysterious Stranger* にしても完成された作

品ではなく、全体の統一性に欠ける。特に最終章は前章までの作品世界をすべて August Feldner の夢として片付けてしまうだけでなく、存在するのは、ひとり永遠にさまよい続ける “Thought” としての August だけであるという極めて突飛な唯我論的結末を提示する。この不完全さは、これまでさまざまな研究者によって指摘されており、たとえば、Everett Emerson は “No. 44’s long speech is not fully prepared for, since the ending was not attached to the chapters that go before it”¹ と、そして Susan Gillman は “Twain’s self-enclosed dream structure, erected freestanding in the 1904 conclusion but never completely linked to any of the manuscripts, violate in some sense all of the manuscripts.”² と述べている。また、No. 44, *The Mysterious Stranger* の断片性をポストモダニズム的な手法の先駆けと見なす Maria Ornella Marotti でさえ、最終章に関しては “the deadlock of Twainian thought”³ を示すものと考えている。

また、最終章はそれ自体にも大きな矛盾を抱えている。Forty-Four は “Thought” としての August が唯一の存在であり、あとは一切が彼の夢であることを告げ、彼に対し、 “I . . . have revealed you to yourself and set you free. Dream other dreams, and better!”⁴ と言うが、その一方で、 “You are but a *Thought*—a vagrant *Thought*, a useless *Thought*, a homeless *Thought*, wandering forlorn among the empty eternities!” (187) と述べ、最後に August を愕然とさせる。すなわち、August が悪夢から解放され、より良い夢を見られるのか、それともより良い夢を見られずに、空虚な永遠のなかをひとりさまよい続けるのかが決定不可能である。実際、最終章に関しては対照的な解釈が存在する。たとえば、Benette Kravitz は “As the text stands . . . , Twain has ‘projected’ the existential opportunity for man to create a better world and a better history than the ones in which the author lived.”⁵ と述べ、最終章が世界や歴史を変革し得るという可能性を示唆していると指摘する。一方、Susan K. Harris は “The terror of history

lies in *him* [August]; some evil in his imagination initiated the horror of those casual chains. Consequently, he is appalled because he realizes that he *cannot* create 'better' dreams.”⁶として、Kravitzとは正反対の仮定的な解釈を与えている。

本稿では、以上のようにNo. 44, *The Mysterious Stranger* の最終章が前章までの内容と調和しない理由、そして最終章自体に矛盾が生じた理由を考察する。

2. キリスト教的倫理観から新しい人間観へ

No. 44, *The Mysterious Stranger* のテキストは、キリスト教的倫理観を破棄し、新しい人間観、世界観の構築を試みようとする実験の場である。実験の場と言ったのは、物語の核である新しい人間観、世界観が仮定的だからである。この仮説は、19世紀末に欧米で隆盛した心霊・心理学研究を抜きにしては語れないので、ここでは、ひとまずキリスト教的倫理観がどのように周縁に追いやられていくか論じる。

Mark Twain の作品中に現れる道德観念について論じるとき避けて通れないのは、Charles Darwin とアイルランド出身の歴史家 William Edward Hartpole Lecky の影響である。Lecky は *History of European Morals from Augustus to Charlemagne* のなかで道德家を “intuitionist” と “utilitarian” に分類している。⁷前者は人間が生得的に善悪を区別する能力を有していて、義務として善行を行うものと考え、後者は道德意識が経験によって培われると説き、人間の道德的行為を私利に基づくものとする。Twain は Darwin の *The Descent of Man* を読んで、他人の苦しみを取り除こうとする行為が利他的な動機からではなく、他人の苦しみを見て湧き起こる自分自身の苦しみを取り除きたいという衝動から生じるとする考えに共鳴していたため、のちに Lecky の著作を読んだとき、“utilitarian” の主張にひかれたが、同時に、善悪の判断は社会の価値基準に左右されるから道德的直観と良心は必ず

しも同一ではないとする“intuitionist”としての Lecky の考えにもひかれた。実際、Darwin 的もしくは utilitarian 的な道徳観念は *What Is Man?* の老人の考え、すなわち、道徳的行為は自分自身の良心を満足させるための行為にすぎないとする考えに現れ、Lecky 的な道徳観念は *Adventures of Huckleberry Finn* のなかの、奴隷制度を神が与えた神聖な制度とする南部の教会や南部社会の価値基準に基づく良心“deformed conscience”と、地獄に堕ちても逃亡奴隷の Jim を救おうと決心する Huck の“sound heart”に現れる。

また、Twain の道徳観念に関する考察は聖書の「創世記」にまで及ぶ。Adam と Eve は禁断の木の実を食べて“innocence”を失い、道徳観念を獲得した結果、悪を思い、罪悪感に悩まされるようになったとする“Letters from the Earth”の Satan は、続けて“The Church still prizes the Moral Sense as man’s noblest asset to-day, although the Church knows God . . . did what he could in his clumsy way to keep his happy Children of the Garden from acquiring it.”⁸と語る。もちろん、Satan の話は道徳観念が知識や経験によって培われるということを比喩的に言い表したものであろうが、ここでは、そういった道徳観念をいまだに人類のもっとも貴重な財産と見なして尊んでいる教会が非難の対象にされている。

No. 44, *The Mysterious Stranger* は、Forty-Four と August の葛藤を通してこのような道徳観念——世界から遠く離れた中世オーストリアの中央に位置する Eseldorf という閉鎖的な村の価値基準では社会的／カトリック的倫理観——に基づく行為の独善的一面に加えて、その虚しさをも前景化してみせる。

Eseldorf は子どもたちにとって楽園のようなところであるが、その一方で“good Catholics”の育成を目指した道徳教育を行っている。August 自身、典型的な“good Catholic”であり、善悪の判断基準を社会的かつカトリック的な道徳観念の上に置いている。このことは、彼が悪魔によって建造された

橋の言い伝え、悪魔と対決したとする Adolf 神父自身の証言、金銭で罪を贖えるという考えを盲目的に信じ込んでいることから窺える。また、このような強固なカトリックの村 Eseldorf も、一度だけフス派の教義の侵入を受けたが、その勢力は Adolf 神父によって一掃され、これが村でもっとも有益な教訓になったと August は述懐している。この August の社会的／宗教的道德意識は、Forty-Four との出会いを通してより鮮明に現れる。Forty-Four がキリスト教徒ではないと知って驚愕した August は、彼の魂の救済を神から与えられた使命であると勝手に解釈して自己満足に浸り、何度となく彼にキリスト教徒になるよう説得を試みる。そして、Forty-Four が死んでしまったと勘違いした際には、彼を永遠の生命に導くことができなかったという罪悪感にひどく苛まれる。

一方、Forty-Four はキリスト教的な道德意識を全く持たない“innocent”な存在である。彼を改宗させようとする August に対して全然関心を示さず、逆に道徳的行為の虚しさを説く。たとえば、ある冬の朝、溺れる Adolf 神父を助けるために水に飛び込んだ若くて有能な画家 Johann Brinker は、それが元で廢人同様となり、30年ものあいだ寝たきりの生活を送ることになる。彼の母親は発狂し、姉妹たちは自分たちの夢や希望を捨てて、彼の看病に人生を費やす。このような哀れな家族の様子を見て、Forty-Four は“All this it costs to save a priest for a life-long career of vice and all forms of shameless rascality! Come, come, let us go, before these enticing rewards for well-doing unbalance my judgment.”(105) と言い、道徳的行為の虚しさを強調する。August 自身、その晩、この哀れな家族の一員となる夢を見る。その夢のなかでは、酔っぱらいの“the infamous priest”(105) が常にそばにいて、彼らを嘲っている。また、次の日の夜明けには、Johann の母親が魔女として、他ならぬ Adolf 神父によって火刑に処せられるのを目の当たりにする。彼女が天国に召されたと信じて疑わない August に対して、Forty-Four は彼女が地獄に墮ちたことを告げ、地獄の様子を眼前に映し出す。

このように、Eseldorf ではもっとも尊ばれる社会的／カトリック的 道徳観念に基づいて Forty-Four を教化する努力に自己満足を見出し、失敗しては罪悪感に悩まされる August に対し、Forty-Four は道徳的行為の虚しさを訴える。Brinker 一家にしても、Johann が Adolf 神父の命を救いさえしなければ、みな幸福に一生を過ごしていたかもしれないし、母親も地獄に堕ちずにすんだかもしれないのだ。

こうして、Eseldorf のキリスト教的（カトリック的）倫理観は Forty-Four によって、次第にその非合理性を明らかにされ、August の世界のなかでは次第に周縁に追いやられていく。そして、かわりに新しい人間観が Forty-Four によって提示される。それは、一個の人間が不滅の存在 “Soul”，目覚めているときの存在 “Waking-Self”，そして眠っているときに活動し、道徳心を全く持たない自由な存在 “Dream-Self” から成るといふ、いわば人間の多重人格性を説いたものであり、Jason Gary Horn が “Mark Twain’s religious psychology of the divided self”⁹ と呼ぶように、ある意味で宗教的な意味合いも持つ。

3. 心霊・心理学研究および対立する人間観・世界観

1880年代から1890年代にかけて、欧米では心霊研究ならびに心理学の研究が盛んになった。その中心的役割を担ったのが、1882年にイギリスで設立された The Society for Psychical Research (S.P.R.) である。この協会の会員たちによって、さまざまなオカルト現象を科学的に解明しようとする試みがなされ、「無意識」という概念がクローズアップされた。S.P.R. には Frederick W. H. Myers, William James, さらに、Jean Charcot, Pierre Janet といったフランスの心理療法医たちをはじめとして、数々の研究者が会員として名を連ね、1911年には Sigmund Freud も入会した。Twain も 1884年に会員となり、熱心にその機関誌に目を通した。¹⁰

Forty-Four が説く新しい人間観は、こうした心霊・心理学研究から影響

を受けており、そのことに関しては、何人かの研究者が言及している。たとえば、Gillman は London Psychical Research Society の会長 Frederick Myers の理論と Twain の仮説の類似性を指摘する。¹¹ Myers は Charcot, Janet, Freud といった当時の心理療法医による臨床例、そして S.P.R. によって実施されたり、収集されたりした心霊現象に関する実験の結果を概括し、人間の多重人格性を理論化した。彼は人間の心を 閾上 (supraliminal) と 閾下 (subliminal) に分け、夢、催眠状態、人格交替等の現象を、閾下から思考が識閾を越えて奔出する例として受けとめた。そして、無意識を意識の下位に位置づける当時の心理学者と異なり、彼は閾下を創造力、インスピレーションの源として重視した。Gillman はこうした Myers の理論が Twain の言う三つの自己 “Waking-Self”, “Dream-Self”, “Soul” に類似していると指摘する。“Soul” は肉体から解放されると、並みはずれた力、情熱、感情を外に表すことができるし、“Dream-Self” もまた、創造力が豊かで、自分が想像したことを何でも実現する能力を持つ。さらに Gillman は Myers が *Human Personality and Its Survival of Bodily Death* (1903) のなかで分類、総括したテレパシー、透視、幽霊等の心霊現象が “The Mysterious Stranger” の諸原稿に見られると言う。このほかにも、たとえば Horn は No. 44, *The Mysterious Stranger* と William James, 特にその著作 *The Varieties of Religious Experience: A Study of Human Nature* との関連性を論じている。¹² また、Twain 自身、“Mental Telegraphy” のなかで、彼の夢や無意識に関する認識は William James と催眠状態に関するフランスの実験 (Horn によれば、前述の Jean Charcot と Piere Janet) に負うところが大きいと述べているとおり、彼が S.P.R. の研究をベースにして、独自の心理学的人間観を構築していったことに間違いはない。

そして、Forty-Four が August に語る人間観においてもっとも大切なことは、人間の主体性の危うさである。Forty-Four は自分の説く人間観を裏づけるかのように、August に肉体を消し去り、“Soul” になる術を伝授し、

城内の印刷工たちの“Dream-Selves”には肉体を与える。彼らは、ストライキを打って主人を窮地に追い込もうとする印刷工たちの意思とは裏腹に黙々と働き続ける。また、Marget Regen は彼女を愛する August には無関心で、August の“Dream-Self”である Emil Schwarz に恋をする。しかしながら、彼女がいったん催眠状態に陥ると別の人格 Lisbet von Arnim が彼女の肉体を支配し、August を愛する。Forty-Four が引き起こすこの不思議な出来事は、人間の行為が自分の意思で決定するのではなく、内なる他者である無意識によって左右されるという考えを喜劇的、寓意的に物語化したものだと言える。

最終章に進むと、そこには特異な世界観が示される。August は一個の“Thought”でしかなく、この宇宙全体が August によって創り出された夢だと言うのだ。この結末は前章までのなかに暗示されている。この物語の舞台となっている Eseldorf は第 1 章で次のように描写されている。

Austria was far from the world, and asleep, and our village was in the middle of that sleep, being in the middle of Austria. It drowsed in peace in the deep privacy of a hilly and woodsy solitude where news from the world hardly ever came to disturb its dreams, and was infinitely content. (3)

この描写によって Eseldorf は眠りについており、そのなかの出来事はすべて夢であるということが暗示される。次に、第 2 章では舞台が Eseldorf から Rosenfeld の城内へと移行する。この城は村の奥深いところに位置する絶壁の上に立ち、なかでは密かに印刷の仕事がなされている。また、この城は数百年も前に建てられたもので、すでに荒廃しているうえ、内部が迷路のように入り組み、幽霊が出るとさえ噂されている。こういった城の描写は、不可解な無意識の世界を連想させる。さらに、“I am made in the image of God.” (113) と憤慨する August に対し、Forty-Four は“Man . . . was built

out of thought. . . . All things that exist were made out of thought.” (114-115) と言って、実際に無から金貨を創り出してみせる。明らかに、これらの記述は一切が“Thought”としての August によって創り出された夢であるとする結末に合致する。

しかし、キリスト教的倫理観の非合理性を根拠にして、すべてを August の夢であると結論づける最終章の世界観は、Forty-Four の意図するとおり、キリスト教的倫理観を夢として周縁化するが、それと同時に、図らずも Forty-Four 自身によって説かれた新しい人間観までも作品世界の周縁に追いやってしまい、さらに人間の存在自体の不確実性をも提示する。August は“Waking-Self”, “Dream-Self”, “Soul” から成る一個の人間、あるいはそのいずれかではなくて、安住の地を持たず、さまよい続ける無益な“Thought”なのだ。

Harris は Twain が August を小説家に見立てていると言う。

Twain . . . sees August as the novelist who is responsible for the worlds he creates. As fictions, novels are worlds in themselves, and in “No. 44, *The Mysterious Stranger*” Mark Twain portrays the novelist’s imagination as a reflection of divine creativity. The writer can create worlds and destroy them, too. At the end of this novel we are left with the void, and the “empty and soundless void” illustrates the mind of the writer before he begins to dream.¹³

彼女は、No. 44, *The Mysterious Stranger* のメタフィクション的な読みに加えて、August と小説家の性質の類似点から、直接的に August イコール小説家であると述べている。確かにこの作品は、いわゆる“dream writings”を含め、夢に言及した Twain のほかの作品とは性質が異なる。後者は多くの場合、個人的な経験、特に人生の辛い現実を主人公の夢として描く傾向にあるが、前者は宇宙全体を主人公が無意識的に創り出した夢としている。こ

れは以下の説明のとおり作家と作品世界の関係から類推されていると考えられる。

Twain は 1878 年に、人間の思考が遠く離れた相手に無意識的に伝達され得るとする、実体験に基づいたエッセイ（世間からの誤解を恐れ、1891 年にはじめて“Mental Telegraphy”という題で *Harper's Magazine* に掲載）を書いていたが、1884 年、S.P.R. からの入会要請に応じる書簡のなかで、この“mental telegraphy”という概念を作家の創作活動に結びつけている。

I have grown so accustomed to considering that all my powerful impulses come to me from somebody else, that I often feel like a mere amanuensis when I sit down to write . . . I consider that that other person is supplying the thoughts to me, and that I am merely writing from dictation.¹⁴

この書簡は同年、“Mark Twain on Thought-Transference”という題で *Proceedings of the Society for Psychical Research* に掲載された。また、彼は別のところで、自分の創作活動が無意識的ないしは半意識的な状態でなされると語っている。¹⁵ Harris が指摘するように、August と世界の関係が小説家と作品世界のそれであるとすれば、その関係は作家が他者（おそらく無意識）から“thoughts”を供給され、無意識的に作品世界を創り上げるという Twain の持論から類推されていると考えられる。

以上のように、Forty-Four が説く人間観と世界観は、ともに当時の心霊・心理学研究の隆盛を文化的背景に、無意識という概念の探求に端を発しているため、一見、深い関係にあるように思われるが、実は前者が人間の多重人格性に関する考察をもとに、後者が作家と作品という関係の考察をもとに構築されているため、前者と後者の間に矛盾を生じ、互いに相剋している。すなわち、独自の世界観を説いた最終章と、独自の人間観を説いた前章まで（正確に言えば第 33 章は 1908 年に最終章との繋ぎとして最後に執筆された

ので、第 32 章まで) が互いに自らを主張し合っているのだ。

4. 最終章における世界観の矛盾

最後に、最終章自体の矛盾、すなわち、Forty-Four の “I . . . have revealed you to yourself and set you free. Dream other dreams, and better!” (186), そして一番最後の “You are but a *Thought*—a vagrant Thought, a useless Thought, a homeless Thought, wandering forlorn among the empty eternities!” (187) という相容れない言葉について論じたい。

晩年の Twain は二つの顔を持っている。その一つは前述の心霊・心理学研究者としての顔である。彼の無意識やその表象としての夢への関心は、個人の、そして家族の不幸と結びつき、いわゆる彼の “dream writings” へと発展する。Gibson によれば、Twain は晩年、Joseph Hopkins Twichell に宛てた書簡のなかで、自分が孤独な “Thought” であり、まわりの世界はすべてその “Thought” の想像力によって産み出されたグロテスクで残酷な夢であると述べている。¹⁶ Sholom J. Kahn が言うように、生前、発表する予定のなかった No. 44, *The Mysterious Stranger* には重要な伝記的事実が隠されていて、¹⁷ もしも作家の個人的心情を作品と結びつけてもよいものならば、多くの研究者が指摘するように、Forty-Four の最後の言葉は家族を失った（あるいは失う寸前の）老作家の悲痛な叫びであつたに違いない。いずれにしても、Forty-Four は最後に August を “vagrant”, “useless”, “homeless” という語で形容しており、このことは Forty-Four の悲観的な一面、言い換えれば、(Forty-Four は August の無意識の一部なので) より良い夢、より良い世界を創造することなどできないという August の悲観的な一面を表している。

Twain のもう一つの顔は、反帝国主義者としての顔である。1898 年の米西戦争勃発当時、彼はこの戦争を、キューバをスペインの圧制から解放する

ものとして支持していた。¹⁸しかし、キューバ独立のためであったはずのこの戦争は、アメリカ帝国建設のための戦争へと変貌する。この戦争によってアメリカ合衆国はキューバを保護国とし、プエルトリコ、グアム、フィリピンを領有した。パリ条約の批准後、Twain ははじめてその事実を知り、1900年1月には Twichell に彼の失望を書き綴った書簡を送っている。そして、1900年10月にヨーロッパから帰国した彼は反帝国主義連盟に参加し、翌1901年にはニューヨーク反帝国主義連盟の副会長に就任する。そして、その後 Twain は “To the Person Sitting in Darkness” や “A Defense of General Funston” 等のエッセイで帝国主義、特にフィリピン領有に対して激しく批判する。

このような帝国主義への激しい攻撃は “The Mysterious Stranger” の第一原稿である “The Chronicle of Young Satan” のなかにも見られる。第8章、第9章で、Satan は Cain が Abel を殺す場面を皮切に、数々の戦争によって血塗られた人類の歴史を Theodor Fischer の眼前に映し出す。ノアの大洪水のあと、Satan は “The progress of your race was not satisfactory. It is to have another chance, now”¹⁹ と言い、そのあと人類は再出発するが、さらにひどい戦争の歴史が繰り返される。その途中、彼はイギリスによる他国への侵略、ヨーロッパ諸国による中国侵略にも言及する。そして、戦争は少数の人々が大声で煽動して反対意見を封じ込め、国民にその正当性を信じ込ませることによって始まるのだとする彼は、 “Sometimes to get more land, sometimes to crush a weak nation; but never a war started by the aggressor for any clean purpose—there is no such war in the history of your race.”²⁰ と言って、卑劣な帝国主義的戦争の本質を暴く。

Kahn は Satan と Forty-Four の連続性を強調する Gibson を批判して、その二者の異質性を説く。²¹しかし、少なくとも “Dream other dreams, and better!”, すなわち、より良い世界を創造せよと言うときの Forty-Four には Satan が投影されている。だからこそ、はじめに述べたように、 “No. 44,

“The Mysterious Stranger” をベースにして最終章を悲観的な意味に解釈する Harris に対し, “The Chronicle of Young Satan” をベースにして最終章を論じる Kravitz は, そのなかにより良い世界, 歴史を創造し得るという可能性の示唆を読みとっているのだ。

このように, No. 44, *The Mysterious Stranger* には, 同じ心霊・心理学研究に基づきながらも対立する人間観と世界観が提示されているうえに, Forty-Four には悲観的な側面と Satan のなかに見られる社会改革家的な側面が混在しているため, その世界観にも否定的な面と肯定的な面が見られる。そして, こういった矛盾が, No. 44, *The Mysterious Stranger* を統一した作品として解釈することを拒んでいるのである。

注

- 1 Everett Emerson, *The Authentic Mark Twain: A Literary Biography of Samuel L. Clemens* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1985), 250.
 - 2 Susan Gillman, *Dark Twins: Imposture and Identity in Mark Twain's America* (Chicago: The University of Chicago Press, 1989), 170.
 - 3 Maria Ornella Marotti, *The Duplicating Imagination: Twain and the Twain Papers* (University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1990), 129.
 - 4 Mark Twain, No. 44, *The Mysterious Stranger* (Berkeley: University of California Press, 1969), 186. 以下この作品からの引用はすべてこの版によるものとし, 末尾の括弧内にページ数を記す。
 - 5 Bennett Kravitz, *Dreaming Mark Twain* (Lanham: University Press of America, 1996), 148. また, 彼は “The Chronicle of Young Satan” をベースにして最終章を論じている。
 - 6 Susan K. Harris, *Mark Twain's Escape from Time: A Study of Patterns and Images* (Columbia & London: University of Missouri Press, 1982), 42.
 - 7 Walter Blair, *Mark Twain and Huck Finn* (Berkeley: University of California Press, 1960), 134-144.
- J. R. LeMaster and James D. Wilson (eds.), *The Mark Twain Encyclopedia* (New York: Garland Publishing, Inc., 1993), 572-573.
- 8 Mark Twain, “Letters from the Earth,” *Mark Twain: Collected Tales*,

- Sketches, Speeches, & Essays, 1891-1910* (New York: The Library of America, 1992), 894.
- 9 Jason Gary Horn, *Mark Twain and William James: Crafting a Free Self* (Columbia: University of Missouri Press, 1996), 2.
- 10 Horn, 110.
- 11 Gillman, 136-171.
- 12 Horn, 106-148.
- 13 Harris, 43.
- 14 Quoted from Gillman, 139.
- 15 Gillman, 38.
- 16 William M. Gibson (ed.), *The Mysterious Stranger Manuscripts by Mark Twain* (Berkeley: University of California Press, 1969), 30.
- 17 Sholom J. Kahn, *Mark Twain's Mysterious Stranger: A Study of the Manuscript Texts* (Columbia: University of Missouri Press, 1978), 94.
- 18 Jim Zwick (ed.), *Mark Twain's Weapons of Satire: Anti-Imperialist Writings on the Philippine-American War* (New York: Syracuse University Press, 1992), xix-xx.
- 19 Gibson, 134.
- 20 Gibson, 135.
- 21 Kahn, 18.